

## 第4回合同シンポジウム

### 一緒にやろうや『住』に参加して

京都頸髄損傷者連絡会 村田 恵子

車いすを利用して生活をするようになって早や10年あまり、手動車いすから電動車いすに乗り替えて5年経ちます。生活環境は1m60cmの視界から1mくらいの視界での生活になりました。

バリアフリー、ユニバーサルデザインが社会に提唱され、様々な場所に活かされるようになってきたけれど、行く先々で「これって誰が利用するものとして造ったの？」と疑問に思う設備、設置の方法にしばしば会うことがあります。障害のある人となない人の見えないバリア…。

私自身、頸髄損傷者となるまでは想像できない暮らしの現実が驚くほどありました。

今回のシンポジウムに参加して一番に感じたことは、その当事者から情報を得た上で何よりも利用する側の視点と状況に基づいて情報提供と説明をし、合意して造らなければ、辛口な物言いにはなりますが一方的な自己満足でしかない長物が造られ、利用する側は困ってしまう事態に陥るといことです。

紹介された事例、パネリストの方々のお話には納得することしきりで、「当事者・建築・まちづくり・リハビリテーション」といった分野が専門性を活かし連携を取っていけば、きっと障害のある人だけでなく誰もが暮らしやすい環境になるだろうな！と思いました。

しかし、如何せん地域社会の在り方も様々で、なかなか何処でも誰でも同じように障害のある人が十分な情報が得られ住みやすい環境で生活しているわけではありません。そこには地域性を理解しながら活かす方法が必要になってきます。そのためには、このような身近な問題を一緒に取り組む環境づくりが不可欠であり、これからも継続して理解し合う関係づくりをすべきだと思いました。



会場内全員でパネルディスカッション